様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５１６００４

研究課題名（和文）東日本大震災とワーク・キャリアの再体制化に関する研究

研究課題名（英文）Disasters, enactments, and quiet transitions on work careers: A case study in Fukushima

研究代表者
上野山　達哉（UENOYAMA, Tatsuya）

大阪府立大学・経済学部・准教授

研究者番号：９０３２３１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：当該研究の目的は、個人のワーク・キャリアに関する認知が、きわめて予測困難でありながら非常に影響力の強い自然災害によって、どのような過程を経て再体制化していくのかを、東日本大震災という具体的事象をめぐる比較事例的視点から明らかにすることである。文献渉猟、追加的ヒアリング、分析枠組との継続的な相互参照をおこなうことで、説明力の高いフレームワークの確立をめざした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is twofold. Firstly, regardless their backgrounds we explore some theoretical frameworks and constructs which seem be suitable to explain the process of reconstruction of individual career perception triggered by almost unpredictable natural or artificial disasters — as 2011 Great East Japan Earthquake and Fukushima Daiichi Nuclear Disaster. Secondly, partially instructed by the hunted frameworks and constructs, we will show a case analysis based on qualitative data collected from interviews. The primal significance of empirical analysis of this study lies on the description itself related to what they have been felt, thought about their work and career, and done since the historically rare incident occurred. However, we attempt to draw some implications based on the findings with reference to the relationship between serious disaster and individual career, which have been rarely focused as a issue of career study.

研究分野：経営学

キーワード：経営学

１．研究開始当初の背景

多くの自然災害は予期が極めて困難でありながら、個人の仕事を中心とした生活にたいして、しばしば長期的に、大きな影響を与える。もちろん、この点についてキャリア研究者も無関心ではなく、キャリア・トランジション研究の中には、移行の契機となる事象として、合衆国南部におけるハリケーンによる災害（2005 年）や、ハイチにおける地震災害（2010）年をあげるものもあるが、本格的な調査研究はほとんど見受けられない。

２．研究の目的

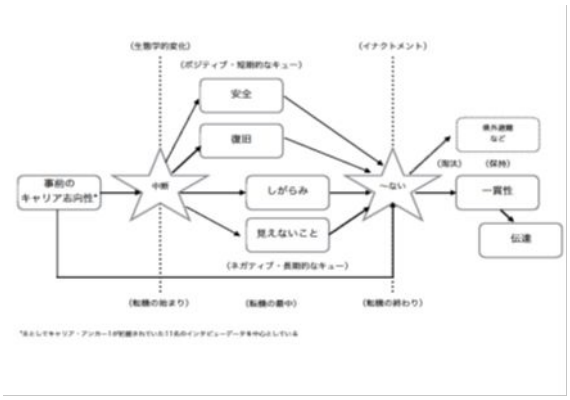
当該研究の目的は、個人のワーク・キャリアに関する認知が、きわめて予測困難でありながら非常に影響力の強い自然災害によって、どのような過程を経て再体制化していくのかを、東日本大震災という具体的事象をめぐる比較事例的視点から明らかにすることである。理論的には、ワーク・キャリアにおける環境変化を主として扱うトランジション研究における鍵概念の批判的再検討を目的としている。経験的分析としては、歴史上稀有な自然災害である東日本大震災に主眼を置くことで、研究の独自性を追求するものである。

３．研究の方法

当該研究においては、(1)先行研究および資料の渉猟、すなわち（1a）キャリア・トランジションおよびセンス・メイキングについての諸研究、および（1b）東日本大震災および福島第一原子力発電所事故にかかわる各種資料の収集、(2)震災後のキャリアの再体制化についてのフィールド調査をつうじて、自然災害におけるワーク・キャリアの再体制化についてのフレームワーク導出をおこなった。

４．研究成果

当該研究で導出されたフレームワークを示す。はまず、定性的データより導かれた 9 つのカテゴリーをひとつのプロセス・モデルに統合し、それによってワーク・キャリアの再体制化を説明することを試みたい。図１において、このプロセス・モデルにはトランジションのパースペクティブとセンスメイキングのパースペクティブが相補的に反映されている。



センスメイキングのパースペクティブから見ると、この過程は以下のように説明できる。Weick がいうように、これは継続中のプロセスである。しかしながら、「中断」によってひとびとはセンスメイキングのあたらしい段階に移った。本研究の事例でいうと、ひとびとの日常的な、あるいは長期的なキャリアにかんするものも含めて、もろもろの期待が震災によって中断されたということになる。それゆえ、このような中断はひとびとにネガティブな性質をもつ情緒をもたらした。たとえばそれらは、おそれや不安といったようなものである。

まったく予想のできなかった震災後の日常的（めったにない災害の直後であるから、この語法は不自然であるようにも思われるが、日々の、という意味で）な生活のなかで、混乱と多義性に満ちた状況を理解するために、ひとびとがキューとしていると考えられるカテゴリーとして、われわれは「安全」「復旧」「見えないこと」および「しがらみ」の 4 つを抽出した。安全や復旧は肯定的な文脈と関連づけられることが多く、見えないことやしがらみについてはかならずしもそうでないという傾向が指摘できる。また、安全と復旧は、震災後 8～9 ヶ月経過後の面接時点から振り返って、震災直後の短期的な状況とむすびつけられることが多かった。他方で、しがらみや見えないことは、面接時点以降の長期的な見通しについての文脈とむすびついている傾向が見られた。このような結果を考慮すると、４つのカテゴリーは(1)安全・復旧、(2)しがらみ・見えないこと、というサブプロセスに分けることが可能であるかもしれない。

これらさまざまなニュアンスをもつ 4 カテゴリーは、「～ない」とわれわれが名づけたカテゴリーにある鍵フレーズ、たとえば「仕方がない」「しょうがない」といったことばで要約され、統合される。このカテゴリーは被面接者の仕事やキャリアをふくめた全般的な環境をイナクトするための鍵となっている。このイナクトによって、キャリアの見通しが変わらないという「一貫性」と、それによってさらに自分の考えや意見を近しいひとにより明確に伝えるという「伝達」が導かれている。データによって明示されているわけではないが、このイナクトメントにつづいて、たとえばあらためて県外避難を考えるといった行動が淘汰され、日常生活での放射性物質との付き合い方を考えるといった行動につながり、一貫性と伝達に要約される行動が保持されていると考えられる。

また、キャリア再体制化の一連の過程はもちろん、トランジションのパースペクティブからも理解できる。転機の始まり、転機の最中、転機の終わりという Anderson らの段階モデルにもとづくと、震災による中断によって、ひとびとはそれまでの日常生活から抜け出し、未知の、混乱した、不安定な段階へと

移行した。震災直後のもろもろの不便や必需品の不足は、キャリアにおけるトランジションの事例研究はもちろん、それらが基礎とする文化人類学の、たとえばvan Gennep (1909)によって通過儀礼の特徴としてあげられた、感覚の遮断や行動の制限などと容易に結びつけることができる。転機の最中の段階にあるさまざまな制限のもと、ひとびとは危機への対処策を手探りで求めた。安全、復旧、見えないこと、しがらみといった4つの要因は、今後この転機をもとにキャリアの意思決定をどのようにおこなうかについての諸基準となっているのである。

本研究の理論的含意としては、以下の2点にふれておきたい。第1に、ワーク・キャリアの再体制化にたいするセンスメイキング・パースペクティブ導入の有効性についてである。福島県民の東日本大震災および原子力発電所事故への反応はおおむね3つに区分される。すなわち、(1)津波や原発事故などで県内外への避難を余儀なくされたひと、(2)低線量被曝の問題などから自主的に避難したひと、(3)とどまることを選択したひと、である。本研究では主として(3)のひとびとに焦点をあてた経験的分析をおこなったが、(1)(2)(3)それぞれのグループが、集合的なアイデンティティを形成しつつその後のキャリアについての意思決定をしていると考えられる。繰り返しになるが、今回の震災が目に見える被害のみならず、低レベルの放射線という見えない被害ももたらしており、それについてどのようなとらえ方をするかによって、キャリア上の意思決定がおおきく影響されている。もともと、自然災害は多くのひとびとに同じタイミングでインパクトを与えるので、個人的なキャリアの転機単独としてよりは、その側面とあわせて集合的事象あるいは相互作用として理解するほうが適切であると考えられる。さらに放射線の問題については、科学的に何が正確な情報かという点にあわせて、しばしばそれ以上に、どのように理解することに納得性があるのかという点が、多くのひとによって重要であった。このような側面からも、センスメイキング・パースペクティブの有効性が指摘できる。

第2に、トランジション概念への含意がある。本報告のケースでは、従来のトランジション研究が前提としてきた点と異なる側面がみられる。被面接者たちは震災と原発事故という状況の大きな変化に直面し、それまでの日常からは確実に切り離された。しかしながら住居を失ったわけでも、家族を亡くしたわけでもない。仕事や職場での役割もとくに変わったわけでもない。さらには、どっちつかずの状態で「このままでいいのだろうか」と自問したひとは少なくないにせよ、今後の仕事や全括全般についての見通しも、とくに変わった点はないと全員が回答したのである。　すなわち、このケースでは、トランジションのプロセスを経験しながらも、一連のプロセスの結果としてトランジション研究が前提としてきた「変化」がみられないのである。われわれは、この結果をどのように理解すべきであろうか。このようなケースは、結果としての変化が見えないので、トランジションから除外すべきなのであろうか。

ここでは、以下のような理解を試みたい。本ケースのひとびとは、震災と原発事故という大きな変化が刺激となり、とまどいや不安をくぐったことが、あらためて従来のキャリア諸要因の一貫性を高めたのではないか、というものである。このようなプロセスをよく説明できるのは認知的不協和の理論(Festinger, 1957)であろう。またそれはしばしば、本人たちが意識していない深いレベルで起こる「変化」であるといえるかもしれない。

以上の議論をもとに、われわれは「静かなトランジション(quiet transitions)」という概念を提示したい。これはキャリアにおける顕著な状況の変化に対する順応プロセスであり、キャリアの客観的・主観的諸要因にわかりやすい結果としての変化はないが、逆にそれらの一貫性やそれらへのコミットメントを高めるようなできごとを示すものである。静かなトランジションの事例としては、本研究のような災害からの復旧以外にも、転職の誘いがあり、さんざん悩んだが、結局もとの仕事をつづけることにしたというものや、療養・リハビリテーションを経て仕事に復帰したというものなどがあげられよう。状況の変化のインパクトが大きいほど、またどっちつかずの状態が長く続くほど、新たな段階に移行するのと同様に、もとの状態に復帰することもある。しかしこれもまた、個人により大きな負荷を与える順応の過程となるのである。従来注目されてきたトランジションと、静かなトランジションという分類は、キャリアにおけるさまざまなできごとについて、変化と順応のプロセスとしてとらえることを、理論的にも実践的にもより豊かにすると、われわれは考える。

本研究の成果であるこのフレームワークは、ワーク・キャリアにとどまらず、ライフ・キャリア自体の中断を引き起こすような大きな事象が起きた時にでも、変わらない事を選択するというのが、何故生じうるのかというメカニズムを知る上では、重要な側面を照射しているともいえるだろう。今後は、より長期の時間軸の中で、この「一貫性」が変化したのか、あるいはその後も継続しているのかという点を追調査する必要性がある。

また、各概念の関係性については、若干の検討の余地がある。例えば、「一貫性」と「伝達」の関係である。「一貫性」の選択と同時期に行動として現われる「伝達」は、「一貫性」を選択したことと現実に残る様々な課題との間に生じる認知的不協和を解消するための行動としてとらえられる。つまり、自分が働きかけても変えることのできない状況

に直面した場合に、そこでの選択をすることで生じる不安を解消するための行動として、他人にそこで経験したことを伝えるという行動をとるという解釈である。ただ、一方では、行動自体には変化は生じていないが、心理的に生じた変化の結果が表面的に現われたものが「伝達」という行動であるという解釈もできる。この考え方にのっとれば、「静かなトランジション」が生じた場合、トランジションが起きる前後で環境を変えないという「一貫性」が保たれる一方で、内的な考え方や価値観自体には変化を生じさせており、その内面の変化が、これまでとは異なる行動として現われるという考え方である。この点については、今後より精緻化していく必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

上野山　達哉・櫻田　涼子「トランジションはつねに『結果としての変化』をともなうか？：東日本大震災被災地事業所従業員のケースをもとに」『経営行動科学学会年次大会発表論文集』経営行動科学学会、第 16 巻、411-416 ページ、2013 年 10 月、査読有。

上野山　達哉・櫻田　涼子「自然災害によるワーク・キャリアの再体制化とイナクトメント：東日本大震災被災地事業所従業員のケースをもとに」『商学論集』福島大学経済学会、第 84 巻第 3 号、37-52 ページ、2016 年 3 月、査読有。http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/dspace/handle/10270/4382

〔学会発表〕（計　1　件）

上野山　達哉・櫻田　涼子「トランジションはつねに『結果としての変化』をともなうか？：東日本大震災被災地事業所従業員のケースをもとに」経営行動科学学会第 16 回年次大会, 名古屋大学（愛知県名古屋市）, 2013 年 10 月 27 日.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

上野山　達哉（UENOYAMA, Tatsuya）

大阪府立大学・経済学部・准教授

研究者番号：90323188

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：